

マラマッド文学における移動の描写基調

—ユダヤ的特質を巡って—

前田 譲治

梗概

登場人物が生活の質的向上を目的として自由意志により移動を行った場合、例外なく、希望とは完全に反した結果が訪れる一貫性をマラマッド文学は内包する。それらの行動を行った登場人物に対する作者の視線も冷淡である。他方、人口に膾炙した複数のアメリカ文化論が、アメリカ人は移動を生活状況の向上に資するものと認識する傾向が強い点を強調している。そうであるならば、マラマッド文学は、アメリカにおける一般的価値観に対するアンチテーゼを展開する側面を持つ。他方、ユダヤ人の歴史に着目すると、ユダヤ人の移動に関しては、自由意志とは無関係に環境に強いられる形で実行され、また、自由には行えなかったイメージが支配的である。そのようなイメージを持った、ユダヤ人にとっての典型といえる移動を行う登場人物がマラマッド文学には多数登場する。それらの人物は肯定的に描かれる傾向が極めて強く、作者の共感の対象となっている。以上に確認できた、二種の移動各々に対する作者の対極的な評価を根拠に、マラマッドを、ユダヤ人の歴史を意識し続けつつ執筆活動を行い、Americanization を拒絶する姿勢が鮮明な作家と位置付けた。

キーワード

Pictures of Fidelman, “Behold the Key”, “The Maid’s Shoes”, Benjamin Franklin, pogrom, the Holocaust

序論

Bernard Malamud の作品には、移民体験について語る在米ユダヤ系一世が多く登場する。他方、ユダヤ系、非ユダヤ系を問わず、アメリカ人を渡航先の海外（殆どがイタリア）を背景として描いた短編小説も非常に多い。あるいは、出生国内において、意識的、積極的に移動を行う登場人物も目に付く。このように、マラマッド文学においては、地理的移動が大きな存在感を持つ。ゆえに、マラマッド文学における移動の意義については、Guido Fink (157) や Christof Wegelin (139-51) がすでに論考している。しかしながら、マラマッド文学における移動の意義を、ユダヤ人固有の歴史的背景を明確に視野に入れつつ分析した先行研究はない。加えて、各登場人物の移動の動機は精査すると大別して二種存在する事実も、看過されている。また、二種の動機に支えられた移動各々

を作者が如何に評価しているかという点も、検討されていない。それゆえ、本稿では、以上の欠落を補完すべく、二種の移動が各々如何なる基調で描写されているかを明示したい。その上で、移動の描写に伴う二種の基調が、作者の民族的背景と如何なる形で通底しているかを、ユダヤ人にとっての移住の歴史的意義を再確認することにより、究明したい。以上の過程を通して、マラマッド文学の移動描写に秘められたユダヤ的特質を明確化することを本稿の最終目的とする。

I

最初に、登場人物が自由意志で海外渡航した際の、移動の描写基調を分析したい。連作短編集 *Pictures of Fidelman* 所収の全短編が、イタリアを舞台としてユダヤ系アメリカ人 Arthur Fidelman を描いている。短編集は移動直後の主人公の描写で始まり、主人公の帰国と共に終了し、移動が多大な存在感を持つ。各短編を配列順に分析すると、“The Last Mohican” でフィデルマンは、Giotto 研究を活性化すべくイタリアに渡航する。彼は到着早々、ユダヤ系難民 Shimon Susskind からスーツを無心される。要望の拒絶後も、サスキンドはフィデルマンが滞在する部屋に突然現れ (12)、彼から逃れるために滞在先を変更した後も、フィデルマンは彼に再三付きまといられる (17, 20)。結果的に、フィデルマンの精力はサスキンドからの逃避に浪費され、彼は研究に集中できず、研究の効率化という渡航目的に反する結果が生じている。加えて、“loosening his tight, efficient program of library hours and visits to the museums, by adopting the lax Roman custom of late dinners, too much wine and spaghetti, naps and *passegiate*” (Fink 157) という指摘のとおり、イタリア固有の習慣も彼の研究に悪影響を及ぼす。

その上、フィデルマンは精魂込めて執筆した論文原稿をサスキンドに盗まれる。盗まれた原稿不在では論文執筆の進行が不可能と判明し、盗難原稿の探索にフィデルマンは三ヶ月近く浪費する (30)。盗難はフィデルマンを呪縛し、彼は搜索以外の営為が不可能となり (30)、安眠すらも妨げられる (31)。このように、渡航の所期の目的が全く達成できない様子が描かれ続ける。移動後に彼が得るのは、彼の関心の埒外の、“growth as a human being” (Abramson 80) である。しかも、彼の精神的成長は後続短編において明確に退行している。

“Still Life” で、フィデルマンは画家である。この設定は、前短編でフィデルマンの渡航目標であったジオットー研究が、徒労に終わった事実を暗示する。その上、彼は、下宿の大家 Annamaria Oliovino への恋慕の情に苛まれ、また、彼女の複数の情夫への猛烈な嫉妬心に煩悶し (46-47)、いかに自制しても創作に集中出来ない (40-41, 53)。彼の創作活動は、画家アンナマリアの興味を惹くための手段に墮す (49-54)。加えて、如何に恋慕の情を燃やしても、アンナマリアからフィデルマンは唾棄され続け (59-64)、恋愛でも不毛な結果しか得られない。

フィデルマンは、彼女の歓心を買うために贈り物や饗応を続け、アンナマリアは恋心に付け込み

金銭をも彼から搾取する (50)。他方、フィデルマンは、姉が難儀しつつ行う仕送りを受けており (45)、この点は、彼の人格の低劣さを際立たせる。最後にフィデルマンは貸衣装で神父に変装し、アンナマリアに彼を神父として認識させ、彼女との consummation を達成する。このような姦計を弄する彼にも人格的瑕疵を指摘でき、先行短編に見られた彼の内面的成長は完全に退行している。このように、本短編は、海外渡航が不毛性と人格の低劣化を結果として招く過程を描いている。

次短編 “Naked Nude” においてフィデルマンは、困窮ゆえに犯した窃盗によって逮捕寸前に至る。警官からの逃走中に売春組織に匿われたことが契機となり、彼は隷属の身となるが、その際に彼は賭博で散財している (72)。善意による姉からの仕送りを彼は浪費し続けており、彼の人格の低劣さは再度描かれていている。また、美術品の盗難に必要な贋作の作成を、監禁状態のフィデルマンは強制される (75)。その結果、彼の芸術活動は全て盗難への加担に墮す。フィデルマンが犯した窃盗は更なる犯罪への加担を誘発し、彼の海外渡航に付随する不毛性は、先行二短編よりも、その度合を強めている。当然ながら、彼の内面的な成長も不在である (Abramson 84)。

次作 “A Pimp’s Revenge” においては、フィデルマンの過去五年間の芸術活動の成果の欠如が明示されている (114)。姉の仕送りが途絶え、彼は生活費を稼ぐための彫刻に時間を奪われ (101)、また、性衝動に翻弄され (103)、作画に専念できない。性衝動に駆られる彼は、売春婦 Esmeralda と同棲を開始する。彼女が傍に居ると作画に専念できず (117)、彼女は創作に不利益をもたらすが、彼は同棲を継続する。やはり、フィデルマンの創作意欲は肉欲に圧倒されている。その後、フィデルマンの困窮状態は極まり、それを見かねたエスメラルダが売春の再開を申し出ると彼は黙認し (137)、彼女の護衛や客引きも行い、売春に積極的に関与し始める (140)。このように、フィデルマンは、本来の渡航目的の芸術活動から疎遠になる一方である。

最終的に、フィデルマンは傑作と思しき肖像画を完成する。しかし、エスメラルダの元女衞に指摘された微小な瑕疵の修正に拘泥した結果、彼は完成品を損ない、自暴自棄から、それを破棄する場面で本短編は終了する (147)。彼の本分たる芸術活動の不毛が、本短編の一貫した基調である。また、エスメラルダの元女衞に対し、少女エスメラルダを搾取することの反倫理性をフィデルマンは指弾していた (110)。つまり、彼の偽善性も痛烈に描かれている。本短編の彼に、“his ignorance of life” (Abramson 86) が指摘されるのも当然である。

続く、“Pictures of the Artist” のフィデルマンも困窮の極致で画材の購入も不可能なため、地面に穴を掘り、芸術と称している。彼が私有地で創作を行った場合は地主に迷惑を及ぼし、公園などの公共の場を用いた場合は投獄に至っている (152)。つまり、彼の芸術活動は、他者の利益を侵害するものに墮している。彼の作品が雨で容易に崩壊する点では、創作と言いがたい。それをフィデルマンは芸術と強弁し、詐欺まがいの手法で入場料を徴収して生活の糧とする。入場後に、金銭を搾取されたと痛感した貧しい男性の返金要求も、フィデルマンは冷淡に拒絶する (157)。以上の

彼の態度からは、“Fidelman’s concern is still with artistic fame and not with inner growth and compassion” (Abramson 87). という事実が指摘できる。やはり、渡航は、彼の芸術活動の質と彼の内面性を結果的に共に劣化させている。

最終短編“Glass Blower of Venice”において、フィデルマンの素性は元画家、渡し守 (178) に変化している。つまり、彼の現状も、先行短編での芸術活動における不毛を明示している。彼は、Beppo Fassoli との交遊から、自己の芸術的才能の完全な欠如を現実として受容する (206)。この点に関して、“selflessness and compassion are more important than bad art” (Abramson 89) という認識の獲得、あるいは、“ultimate discovery of self” (Field, Portrait 124) の獲得といった、彼の内的成熟を指摘する声はある。しかしながら、フィデルマンがイタリア滞在に期待したのは、芸術に関する“creativity”の獲得と、“how to paint”の体得である (Siegel 126)。この当初の期待とは対極にある、己の芸術的才覚の欠如の確信が、イタリア滞在の帰結である。また、フィデルマンは帰国後、ガラス職人として活躍するが、それは、芸術が香るイタリアでの長期滞在とは、本質的に無関係である。つまり、イタリア渡航に功利性を期待することの無意味さの強調と共に、本短編集は終了している。

別視点から「ベニスのガラス職人」を眺めると、フィデルマンは既婚の Margherita と姦通する。同時に彼は、その不義を知る、マルガリータの夫ベッポーとも男色関係に陥り、その結果、マルガリータの夫婦関係は阻害される (207)。本短編でフィデルマンが確立する人間関係も反倫理性が際立つ。本短編集におけるフィデルマンの内的変化が、“The social sinking”、または、“the amoral opportunism that takes Fidelman further and further off a moral course as the stories unfold” (Solotaroff 94) と要約されるのも当然である。短編集全体に関して、“Fidelman declines in ‘morality’ as he grows in humanity” (Helterman 80).、さらには、“Generally he grows in self-knowledge and courage as he declines in respectability” (Wegelin 144). という形で、彼の内的成長に反比例して生じる倫理性の低下が指摘されるのも至当なのである。フィデルマンのイタリア渡航の結果の不毛性は、重奏的に描かれている。

他にも、イタリア渡航後のアメリカ人を描いた短編が複数ある。まず、“Behold the Key”において、Carl Schneider は博士論文の執筆の活性化と現地生活の享受を目的として、研究対象が現存するイタリアに移動する。しかし、イタリア到着後一ヶ月に渡って、廉価な賃貸物件を探すための気苦労が続く (58-60)。加えて、詐欺による手数料の獲得を目指す斡旋人 (59) や、虚偽の情報で入居を促す家主 (65, 68) の存在は、カールの精神状態の更なる悪化を招き、期待とは裏腹に、研究活動は全く行なえなくなる (60)。

ようやく、カールが入居を熱望する廉価なアパートが見つかるが、退去予定の借家人 (家主の愛人) が鍵を持ち去り、合鍵を持つ家主付の弁護士、家主、共に連絡が取れない。何とか弁護士に連絡が

取れると、鍵は唯一つしかないことが分る (75)。その鍵を所有する元借家人は、鍵の授受に際して、賄賂をカールに要求する。カールはこの要求を拒絶するも、管理人には賄賂を支払い、ようやく家主と面会する (80)。しかし、家主は旅行の出発直前で、ドアの蝶番を外しての入室も拒否する。その後、管理人は錠前屋に鍵を開けてもらい、強引に部屋に入室したところ、家主（元愛人）への私怨を募らせている元借家人によって部屋は完全に破壊され、廃墟と化している事実が判明する。つまり、カールは入居を熱望しながら、偶然、または突発的事故ゆえに実現できず、時間と労力のみを延々と空費する。この作品は、研究の活性化を目的としたイタリア渡航が、逆に、住居探しが原因となって、カールの研究を完全に頓挫させる様を描いている。

作品冒頭のカール一家はイタリア渡航後であるが、到着早々に起きた出来事は息子の病気である。加えて、作品冒頭の彼の心境は、“depressing,” “disappointed,” “so dissatisfied,” “unhappily,” “unpleasantly lonely for the first time since he had been married” (57) などと表現されている。このような冒頭の描写基調は、イタリア渡航と彼の生活全般の劣化の間に、因果関係を設けようとする作品の姿勢を示す。移動によって、生活の質の向上（本作では、研究の効率化）を期待することの無意味さが、本作の重要な主題である。ほぼ同一の作品構成の短編が他にもある。

“The Maid’s Shoes” に登場するのは、アメリカから渡航し、ローマに単身で滞在中の Orlando Krantz 教授である。イタリア渡航と研究の関係に関しては記述がないが、彼は論文執筆に日夜没頭しており、彼は明らかに良好な研究環境を求めて渡航している。心配性と神経質さが最大の特徴 (155, 158) である教授は、家政婦 Rosa を雇用する。破損した靴を履くローザは、知人男性から靴の贈与を申し出られるが、受領が、関係を姦通に発展させる可能性に悩んでいる。この悩みに関する相談を強いられた多忙な教授は、苛立ちと怒りを覚え、いたく動揺する (160)。その後、教授は意に反してローザの悩みに関わり (162)、ローザを悩みから開放すべく、密かに彼女の靴のサイズを計測し、靴を手ずから購入して贈与する (162-63)。不快感を覚えつつも、教授は研究に割くべき時間をローザへの対処に空費してしまう。しかも、靴の贈与後に、ローザが知人男性からも靴を受領していた事実を教授は知り、憤激に駆られ、彼女を解雇する (164)。神経質な教授は、“upset and very nervous” (164) という状況に陥り、研究は難渋する。さらには、ローザ解雇後の、代替の複数の家政婦は皆不品行が目立ち、短期間で解雇され、アパート内は混乱状況に陥り、研究は完全に頓挫する (165)。

その後、ローザが再雇用を執拗に要求したため (164)、教授は曲げてローザを再雇用する。間もなく、ローザは情夫との間の妊娠を告白し、教授は再度、憤激する (166)。彼女の情夫が妊娠を認めない事実を知った教授は、自ら情夫に連絡し、自分のアパートに呼び出す (166)。このように、ローザの個人的な問題に自戒に反して立ち入った教授はいたく動揺する (167)。にもかかわらず、教授は産婆の診察に必要なお金をローザに前借の形で渡す。ところが、翌日、彼女は産婆の診察を受け

ず、前借を、粗暴極まりない息子への誕生祝に蕩尽した事実を知り、再度、教授は憤怒に駆られる(168)。しかし、教授は自発的に治療費を負担して、医師の診察をローザに受診させ(169)、ローザが妊娠していない事実が判明する。以上のとおり、ローザの私生活とは距離を置くべきという強い自戒にもかかわらず、彼女の悩みに教授は関与し続け、彼の神経質さもあって、研究は完全に阻害され続けている。つまり、本作も、「見よ、この鍵を」同様、イタリア渡航が予想に反して研究の不活性化を招く構成を持つ。生活の質の向上を企図した移動に対して、作者は徹底して辛辣である。

以上に眺めた諸短編には、別の共通項も潜在する。まず、『フィデルマンの絵』では、寒気によって主人公の活動が間断なく阻害される(27, 35, 41, 42, 52, 59, 135)。「見よ、この鍵を」では、暖房がないホテルに滞在中、カールの家族は寒気に苦しめられ、子供は風邪に罹患する(70)。暖房の不在や暖房費用の高額さが、カールの住居探しの継続(研究への障害)の要因となる点も、寒気を生活の劣化を招く因子と位置付ける。「家政婦の靴」でも、猛烈な寒気が教授の研究を阻害する(157, 163)。アメリカではありえない光熱費の高額さが(Pictures 52)、暖房の自由な使用を不可能たらしめ、寒気が屋内を侵食する一因である。イタリアへの移動は、アメリカの屋内には存在しない寒気ゆえに、生活の劣化を招いている。この展開は、冬がイタリアの季節背景として特に設定され続けた結果、生じている。作者が意図的に、移動の結果を生活の劣化と連動させようとしているのは間違いない。

“The Lady of the Lake”に議論を移すと、イタリアに滞在中のユダヤ系アメリカ人 Henry Levin は、移動によって strangers の中に埋没し、偽名でユダヤ系の素性を糊塗し、結婚相手の女性との出会いの可能性の拡大を図る(105)。旅先でレヴィンは Isabella della Seta を見初めるが、彼女を非ユダヤ系と速断し、ユダヤ系の素性を彼女に知られることを極度に恐れる。しかし、レヴィンが行った素性の偽装は、実はユダヤ系のイザベラが、配偶者にユダヤ系のみを想定していたため、イザベラからの拒絶を招来する。つまり、素性の偽装はレヴィンの結婚を阻み、期待とは裏腹の結末を招来している。レヴィンが行った偽装はイタリア渡航(移動)が前提となる。とすれば、本作も、移動に委ねた期待が完全に裏切られる過程を描いている。

長編でイタリア渡航が描かれる唯一の作品が、*Dubin's Lives* である。主人公 William Dubin は愛人との逢瀬を妻に気兼ねせず楽しむため、彼女とベニスに渡る。ところが、愛人との情事は実現せず、逆に、ドゥーピンは愛人をゴンドリエに寝取られ、愛人との関係は悪化する。加えて、イタリア滞在中に偶然目撃した、ゴンドラに乗船している男女の後姿から、娘 Maud が老人と旅行しているとの印象をドゥーピンは漠然と抱き、真偽は不明ながら、その印象はドゥーピンを苛み続ける(80-81)。その結果、彼は、愛人との逢瀬をアメリカにいる際よりも、むしろ楽しめない。以上のごとく、短編、長編に関わらず、イタリア渡航を通して生活の質を高めようとする姿勢を批判的に描く作者の姿が明確化した。

次に、出生国内で行われる移動の描写基調を眺めたい。まず、*The Fixer* のユダヤ人 Yakov Bok は、“Opportunity here is born dead. . . . The shtetl [Jewish Community] is a prison. . . . Here we’re [Jews] all prisoners . . . so it’s time to try elsewhere I’ve finally decided. . . . Change your place change your luck, people say” (7, 11, 12). と考える。その結果、法律で居住が禁じられている、ユダヤ人居住区外に彼は居を移し、生活の劇的改善を図る。この違法行為の結果は、冤罪による長期間の投獄である。投獄中に彼は精神的に成長するが、移動にまつわる所期の目的と、完全に反する結果に陥っている。

ヤーコフ同様、*The Assistant* の Frank Alpine も、“Then he headed east, where he figured he could live the way he wanted—where there was money, nightclubs, babes” (92). という発想に基づき物質的向上を狙う。その結果、フランクは、極度の経営難の食料品店の店主に納まる。移動に託した期待の対極に当る結末が、やはり、フランクに訪れている。(A *New Life* の Seymour Levin は自由意志で西部に移転してはいないため、本論考から除外する。) ここにおいて、すでに確認した、イタリアで登場人物が強いられた幻滅は、現地の特性に根ざすものではなく、移動に伴う必然的帰結として作者が脚色した結果であることが判明した。それでは、このような一貫した創作姿勢が生じた理由を、以下に考察したい。

II

後世に広範に読み継がれ、アメリカの根源的イメージの生成に寄与している点を否定できない記述に目を向けると、J. Hector ST. John de Crèvecoeur は、アメリカ人をヨーロッパからの移動により生活状況を向上させた人々と規定している (38)。同様に Benjamin Franklin は、アメリカへの移動により、ヨーロッパの貧民も豊かな農民に生まれ変われると強調している (608)。さらには、H. D. Thoreau も、有名な随想において、アメリカ国内の地理的移動に、生活状況を激変させる潜在力を指摘している (607)。以上の著者は等しく、移動によって生活改善が可能な場として、アメリカを規定している。Frederick Jackson Turner の “The Significance of the Frontier in American History” は、1893 年の発表後、現在に至るまで広範に読み継がれ、従って、アメリカの歴史的イメージの生成に影響を及ぼしている。その中でターナーは、“Movement has been its [America’s] dominant fact, and, unless this training has no effect upon a people, the American energy will continually demand a wider field for its exercise” (37). と指摘している。つまり、生活改善を求めて移動する意欲を、アメリカ人が時代を超えて保持している点をターナーは指摘している。同様に、Henry Nash Smith も、西部への移動が人生を劇的に変えるという発想に、アメリカ人作家の多数が支配され続けてきた点を指摘する (252)。これらの論調の一貫性は、移動により生活改善を目指す姿勢とアメリカ人を連結する。

さらに、アメリカ人の国民性に目を向けると、移動が成功を招き (Robertson 242)、移動の不在は死や腐食を招くと考えられる傾向があるとされる (Robertson 348)。アメリカ人が移動を肯定的に眺める事実は、“In contemporary American myth and symbol, homes are mobile, communities are mobile, and above all, the individual is, *must* be, *ought* to be, by right *can* be mobile” (Robertson 348)、あるいは、“It [movement] is also the symbol of progress, of independence, and of individual freedom all wrapped in one” (Robertson 243). という形でも観察されている。

以上のとおりアメリカにおいては、長距離・長期間の移住であれ、短距離の移動であれ、生活改善に連なる行動として、肯定的に眺められる傾向が強い。とすれば、移動に生活の質の向上を託した既出の登場人物は、アメリカでの標準的な発想に則って行動している。確認したとおり、そのような企ては幻滅のみを招来していた。そうであるならば、アメリカで支配的な世界観に対するアンチテーゼを、マラマッド文学は総体として構築している。アメリカで支配的な発想を転覆せんとする姿勢をマラマッド文学は打ち出している。しかしながら、ユダヤ人も移民を繰り返してきた歴史を有し、その歴史と移動とは不可分である。それでは、歴史的に見て、ユダヤ人にとって移動がどのような本質を持つのかを次章で検討したい。

III

ユダヤ人が行った移民は2千年以上の歴史を持つため、マラマッドの意識に上る頻度が特に高かったことが容易に推測される局面に限定して考察したい。まず、マラマッドの出自と密接な関係を持つ、ロシア系移民一世代（彼の両親の世代）のアメリカへの移民に注目したい。彼の両親の故国ロシアでは、下記のとおり、1881年以降、国策としてポグロム（ユダヤ人虐殺）が採用された。

An explosion of pogroms filled the years from 1903 to 1906. . . . [T]hese involved much more violence and murder. . . . In 1906, pogroms became practically uncountable, with many hundreds dead, robbed, raped, and mutilated. . . . The Russian government was encouraging pogroms as a matter of policy. (Sorin 34-36)

このポグロムこそが、ロシアからアメリカへ向うユダヤ系移民が、1901年から1914年までの間、特に多かった要因であった (Dwork 102)。この事実に触れたものとして、“In Russia pogroms and official persecution hastened the exodus [of Jews]” (Higham 82). や、“[T]he pogroms had inspired both a call for emigration and a reassertion of Jewish identity” (Cassedy 51). といった指摘がある。加えて、ポグロムでのユダヤ人殺害の目撃により、“[E]migration to America was their only salvation” (Binder 103). という発想が、多くのユダヤ人に萌芽した。実際、ポグロムが発生した

1881年の翌年の一年間のアメリカへのユダヤ移民の総数は、1870年代の総計の半分にまで一気に増大した(Goren 41)。ポグロムの結果を、“a panic flight of Jews from Russia westwards”(Johnson 365)と捉え、ポグロムと移民の因果関係を、“In the pogrom year 1905-6, over 200,000 Jews left”(Johnson 365)と素描する向きもある。マラマッドの父が1905年、もしくは、1906年にロシアからアメリカへ移民したのも、“a rising tide of anti-Semitism and pogroms”を意識してのことであった(Davis 12)。以上のとおり、マラマッドの両親世代の東欧からのユダヤ人の移民は、生命維持を目的として、自由意志とは無関係に実行されている。

そもそも、国策としてのユダヤ人差別においては、ユダヤ人の移動の自由の剥奪が常套手段(Johnson 358, 489)であり、元来、ユダヤ人と自由意志に基づく移動の親和性は低い。さらに、如何なる民族集団と比しても、ユダヤ人のアメリカ移民後の母国への帰還率は低く、渡米した移民のヨーロッパの母国への平均の帰還率が約3分の1であったのに対して、ユダヤ人の場合は約5%であった(Dwork 103)。この点でも、他民族と比較して、ユダヤ人は移動の選択の余地を欠いていた。マラマッドの両親世代の移民(行動)に付随するイメージは、生命維持の方策としての移動、自由意志が不在の移動なのである。

次いで、1930年代のナチス勢力下の国々からアメリカへのユダヤ系移民の在り方を確認したい。後述のとおり、ホロコーストは、在米ユダヤ人にユダヤ人の移動の意義の再考を促している。加えて、ナチス勢力下の国々のユダヤ人に対する、在米ユダヤ人の救済姿勢の消極性は、ユダヤ系メディアの厳しい批判に曝され(Grobman 348, 353)、在米ユダヤ人は在欧ユダヤ人の状況を意識することを強いられた。さらに、ホロコーストを、“two events which flavor their [Jews] thinking and feeling constantly”(Field, Bernard Malamud 113)の一つと位置付ける見方もある。このように、1930年代の在欧ユダヤ人の状況は、在米ユダヤ人の耳目を引く度合いが圧倒的に強く、マラマッドを含めた在米ユダヤ人の記憶に固着している可能性が高く、注目に値する。

歴史的事実を確認すると、Adolf Hitlerが首相となり、ユダヤ系ドイツ人の職業制限や公職追放が実施された直後に、数千人のユダヤ系ドイツ人が国外に逃亡(アメリカ以外の国も含む)するが、騒擾が収束した1933年末には、数千人のユダヤ人が再度ドイツに帰国している(Gay 122-23)。つまり、ユダヤ人のドイツ国外への移動は、本意に反してなされている。実際に、1938年のKristallnachtにおけるユダヤ人虐殺が生じるまでは、ドイツからのアメリカへの移民数は、移民法がドイツに割り当てていた許容数の約3分の1に止まった(Daniels and Graham 27)。具体例を挙げると、1933年には、約2万6千人の移民受け入れ許容数がドイツに割り当てられていたが、1919人しかドイツからアメリカへの移民はなかった(Daniels 78)。つまり、在独ユダヤ人は元来、ドイツ国外に移動する意志を完全に欠いていた。ところが、Kristallnachtの後に、ドイツへの愛国心が強いユダヤ人ですらも国外への移住に傾き、その結果、ドイツからの亡命者の70%以上をユ

ダヤ人が占めるに至っている (Feingold 227)。在独ユダヤ人は、ドイツからアメリカへの移民を、生存上の必要性に駆られて、止む無く行っている。

他方、アメリカの1920年以降の移民政策はユダヤ系移民の排除を念頭に置いており (Feingold 227-28)、在独ユダヤ人を国内に足止めし、生存を脅かす結果となった。あるいは、“the difficulties German Jews were having in getting visas from some American consulates in Germany” (Daniels 73) ゆえに、在独ユダヤ人のアメリカへの亡命は困難を極めた。1941年秋に、ナチスが勢力下の地域からの亡命を遮断するまでは、在欧ユダヤ人は安全な他国に逃れることが可能だったが、アメリカなどがユダヤ人の亡命を拒絶したため、ドイツから脱出できたユダヤ人は少数であった (Wyman 5)。そのため、アメリカによる、ユダヤ人の受け入れ拒否を、ホロコーストの一因と解釈する向きもある (Daniels and Graham 137)。在独ユダヤ人にとって唯一の危機を逃れる方策であった移動 (Brody 183) が不可能であったことが、死を招いたのだ。このように、1930年代の在欧ユダヤ人のあり方も、自由意志とは無関係に生存のための移動を強いられた点と、移動の自由の絶対的な欠如とを印象付ける。

Arthur Miller の自伝 *Timebends* も、在米ユダヤ人が、在欧ユダヤ人の移動に対して、どのようなイメージを抱いていたかを知る手掛かりとなる。彼は旅先のポーランドで以下のとおり、祖先の移動の有無が彼の生死と直結した事実を痛感しているからだ。

[H]ad my grandfathers not decided before the turn of the century that there was no future for them in that country, I would not have survived to the age of thirty. Hardly a Jew was left in that part of Poland once the Nazi war machine had swept across its flat and dreary landscape. (20)

この移動に対する見方は、“American Jews knew that, had their parents or grandparents not left Europe, they too would have been killed” (Neusner 85)。という指摘のとおり、在米ユダヤ人全体に共有されていた。つまり、ホロコーストを契機として、移動の有無と生死の因果関係を痛感させられたのが、在米ユダヤ人なのだ。つまり、アメリカ人が移動に一般的に見出しがちな楽天的なイメージと、ユダヤ人の視点から見ての、移動が有する深刻な意義とは、完全に別存在であった。加えて、自由意志に基づいてなされるのか、それとも、必要に駆られて自由意志とは無関係に行われるのかという点でも、アメリカ人の移動とユダヤ人の移動とは完全に異質である。その上、ユダヤ人の場合、必要不可欠であっても、自由な実行が不可能なイメージが移動に付随する点は、さらに、二者の質的差異を際立たせる。アメリカ人の一般的な移動の概念と、ユダヤ人の脳裏にある移動のイメージとは、対極の関係にある。

加えて、ユダヤ系移民は、アメリカ到着後に移動の自由を得た後も、圧倒的に定住志向が強かった。具体的には、ニューヨークに到着したユダヤ系移民の 70% から 90% が、ニューヨークに留まっている (Dwork 105-6)。ユダヤ人は、他のユダヤ人と共に雇用されることを好んだがゆえである (Dwork 112)。また、アメリカ移住後のユダヤ人は、“[Jews] and often their children remained in the same city all their lives” (Goldstein 83)。とも素描され、定住をユダヤ人の自由意思に基づいた一般的生活様式と見ることが可能である。移動に対する積極性に関しても、非ユダヤ系アメリカ人とユダヤ人の間には根本的な差異がある。以上の、ユダヤ人にとっての移動の本質を踏まえた上で、再度、マラマッド文学に登場する移動の描写基調を確認したい。

IV

自由意志とは無関係に、生存のための移動を強いられるユダヤ人は、マラマッド文学に複数登場する。かかる登場人物は作中で、生存目的の移動とは無縁の登場人物と、何らかの衝突関係を形成する事例が非常に多い。このような構成の作品を複数取り上げ、対立関係にある両者に対する、マラマッドの評価を確認したい。まず、“The Jewbird”において、ユダヤ鳥 Schwartz は反ユダヤ主義者から逃れ、生存のために屋外からユダヤ人 Harry Cohen の家庭に避難する。コーエンは自己のユダヤ性を想起させるシュワーツを唾棄し (110)、家から追放し、その結果シュワーツは虐殺される。このストーリー展開からは、移動に生命を賭けるシュワーツへの作者の圧倒的な共感と、そのような移動とは無縁のコーエンに対する作者の “the implicit accusation” (Solotaroff 80) が指摘できる。作者の類似した評価姿勢は、他作品にも複数指摘できる。

“Idiots First”において、Mendel は死に際にある。ニューヨークにいる 39 歳の息子 Isaac は自活が不可能なため、生存のためには、唯一の身寄りであるカリフォルニア在住の伯父に託される必要がある。マンデルは、列車の切符購入に必要な現金の調達に苦勞し改札時間に遅れる。その際、ホームへの親子の入場を改札係の姿で事務的に拒否する死神が Ginzburg である。入場を拒否する彼に、マンデルは残された最後の生命を賭して挑みかかる。この対立関係は、“human values of love and sacrifice” (Abramson 134) と、“ahuman, inhuman, universal law” (Solotaroff 69) の衝突と解釈できる。つまり、読者皆が、息子の生存に不可欠な移動を実現せんとする悲壮感溢れるマンデルに共鳴せざるを得ない状況を作者は描いている。

“Take Pity”に目を移すと、寡婦 Eva Kalish に対する Rosen の熱烈な愛情の吐露と、エヴァの頑強な拒絶の衝突が延々と続く。エヴァの夭折した夫はポーランド難民で、食料品店を渡米後に開店し、開店時にはエヴァとの間に 5 歳の娘がおり、アメリカに移民しなかったエヴァの同郷人はホロコーストの犠牲となっている (88)。つまり、エヴァの渡米が生存目的である事実が示唆される一方、ローゼンの移民に関する情報は皆無である。資産の潤沢さから、彼が二世世代以降に属してい

ることが漠然と推測できる程度である。二人の衝突関係にあって、否定的に描かれているのはローゼンの方で (Solotaroff 39)、彼の善意は “despotic generosity” (Solotaroff 40) とすら評される。実際に、ローゼンの善意に根ざした自殺は、彼の意に反して、エヴァ親子の自殺を誘発している。この作品においても、生存目的の移動を行った登場人物の方が、対立相手との比較においては、肯定的に描かれている。

“The Loan” では、借金を依頼する Kobotsky と、それを断固拒絶する Bessie との衝突関係が登場する。その対立にあって、二人は共に、自らが体験してきた苦難の吐露によって、相手の譲歩を期待する。苦悩の吐露の競演にあってベシーは、“the superior sufferer” (Bilik 61) として、また、より読者の同情を喚起する人物 (Bilik 61-62) として描かれている。そのベシーはロシアでボルシェビキにより父親を殺害され、その後移住したドイツからホロコーストを逃れるため、更にアメリカに移住している。アメリカに移民できなかった兄一家は殺害され (190)、移動が彼女の生命を維持している。方や、コボツキーもベシー同様、移民一世だが (184)、彼の渡米理由は皆目語られない。やはり、移動によって生存を図った登場人物に、読者が相対的に大きな共感を寄せることを促す作品構造を指摘できる。

「最後のモヒカン族」のサスキンドは、ドイツ、ハンガリー、ポーランドから亡命している。移動が死の回避を目指していた点は、彼の移動が裸ですら行われている事実 (9) から分る。その彼による再三のスーツの無心をフィデルマンは拒絶し続ける。この対立関係を通して、サスキンドはフィデルマンに、“moral growth” (Abramson 79) を招来する。やはり、生存目的の移動を行った人物が、対立相手に対して優位を占めている。

“The First Seven Years” の Sobel も “Hitler’s incinerators” (15) から逃れて、ポーランドからアメリカに移民している。他方、ソベルの雇用者 Feld は彼を “a landsman” (7) と認識しており、フェルドもポーランド移民の一世である。しかし、フェルドに関しては、移民としての背景の記述が、動機を含め皆無である。本短編では、フェルドの娘との結婚を希望するソベルと、その結婚を忌避するフェルドが深刻な対立関係に陥る。その際ソベルは、フェルドに対する “the moral advantage” (Bilik 61) を保持し、やはり、作品構造の統一性に例外は見られない。

『アシスタント』の Morris Bober は “pogroms” (81) を回避するため、すなわち、生存目的で渡米している。モリスと彼の妻 Ida とは完全に異質な価値観を有し、頻繁に意見が対立する。彼女も、モリス同様、移民一世であるが、彼女の移民の動機は一切明示されない。ここで、モリスが、“the ethical center of the novel” (Richman 50) である点に注意したい。他方、アイダは、娘 Helen の意向を無視して、高学歴の男性と娘との結婚を企図するなど、極めて通俗的な価値観を持つ人物として否定的に描かれている。

つまり、上記の対立関係全てにおいて、ユダヤ人特有の移動のイメージと通底する移動を行った

登場人物が、読者のより強い共感を誘発する構造が導入され、それらの人物に作者の好意は寄せられている。また、生存のための移動を強いられる人物は、移動先で例外なく経済的に極めて不遇である。例えば、「最初の七年間」のソベルは、“work for a very little”、あるいは、“His wants were few . . .”と描写され(7)、渡米後も窮状の中に進んで身を置いている。対立関係が不在のため上記の論考から除外した、“The German Refugee”の Oskar Gassner も、ナチスを逃れてのアメリカへの移民の結果、経済状況が大幅に悪化している(198)。以上の一貫性は、彼らの移動をアメリカ人の一般的な移動の概念から完全に乖離せしめ、移動をユダヤ人の歴史と密着したものととして純化する。作者の共感は、このような移動を行う登場人物に対して寄せられている。アメリカ的理念に則った移動を行う登場人物を冷淡に眺めていた作者とは、別個の存在がいる。

結論

マラマッドは、自己が持つ民族的アイデンティティを共有しているユダヤ系登場人物を、無条件に理想化して描いてはいない。あくまでも、歴史的事実を視野に入れた上で、ユダヤ人にとっての移動の本質を念頭に置いた上で、その本質と調和した行動を行っているユダヤ系登場人物に対してのみ、作者は共感を寄せている。つまり、ユダヤ人の歴史における移動の本質を鮮明に意識しつつ、人物描写を行う作者の姿勢が、作品の奥深くに潜在している。他方、移動によって生活環境を改善しようとする、アメリカ人の一般的な発想に依拠した試みを実行した登場人物に対して作者は、ユダヤ系、非ユダヤ系の何れかを問わず、否定的姿勢を示していた。ここには、アメリカ的な価値観の受容を頑なに拒む作者の姿勢を読み取れる。あるいは、在米ユダヤ人が安易に Americanization に身を委ねるあり方を、作者は批判しているとも読める。つまり、マラマッド文学における移動描写は、アメリカ人にとっての一般的な移動の意義と、ユダヤ人にとっての移動の歴史的意義の多大な差異を踏まえた上で、作者自身のユダヤ人としてのアイデンティティを再確認する所作として解釈することが可能なのである。

ここで留意すべきは、ユダヤ人が不在の「見よ、この鍵は」は今まで批評の俎上にほとんど載らなかった点である(Fink 153)。批評の対象となった際も、主人公の“callous Yankee morality and tightness”(Benson 38)、すなわち、主人公のアメリカ的性向に目が向けられ、あるいは、イタリアの現実と作品の関係が着目され(Fink 154-55)、作品のユダヤ的特質を分析する視点は絶無である。あるいは、「家政婦の靴」にもユダヤ人は誰一人登場せず、この作品のユダヤ的特質に関する分析も見当たらない。これらの、作者の民族的背景とは無縁との印象を一見与える作品も、作者のユダヤ人としての自意識によって作品構造が決定されており、マラマッド文学を統括する、作者のユダヤ的感性の強靱さを確認できる。

以上の、マラマッド文学の構造は、その全体を視野に入れた、移動の描写基調の網羅的な分析に

よって初めて鮮明化し、一般的な読書形態によっては容易に知覚できるものではない。それにもかかわらず、移動にまつわる描写の統一基調には作品を超えた偏在性が与えられていた。統一基調の維持に傾注された作者の創作活力は甚大であり、ここに、自己の民族性の確認作業がマラマッドに対して有する重大な意義を指摘できるのである。

Works Cited

- Abramson, Edward. *Bernard Malamud Revisited*. New York: Twayne, 1993.
- Astro, Richard, and Jackson Benson, eds. *The Fiction of Bernard Malamud*. Corvallis: Oregon State U P, 1977.
- Benson, Jackson. "An Introduction: Bernard Malamud and the Haunting of America." Astro and Benson 13-42.
- Bilik, Dorothy. *Immigrant-Survivors: Post-Holocaust Consciousness in Recent Jewish American Fiction*. Connecticut: Wesleyan U P, 1981.
- Binder, Frederick, and David Reimers. *All the Nations under Heaven: An Ethnic and Racial History of New York City*. New York: Columbia U P, 1995.
- Brody, David. "American Jewry, the Refugees and Immigration Restriction (1932-1942)." Gurock 181-209.
- Cassedy, Steven. *To the Other Shore: The Russian Jewish Intellectuals Who Came to America*. Princeton: Princeton U P, 1997.
- Crèvecoeur, J. Hector ST. John de. *Letters from an American Farmer*. 1782. New York: E.P. Dutton, 1957.
- Daniels, Roger, and Otis Graham. *Debating American Immigration, 1882-Present*. New York: Rowman & Littlefield, 2001.
- Daniels, Roger. *Guarding the Golden Door: American Immigration Policy and Immigrants since 1882*. New York: Hill and Wang, 2004.
- Davis, Philip. *Bernard Malamud: A Writer's Life*. New York: Oxford UP, 2007.
- Dwork, Deborah. "Immigrant Jews on the Lower East Side of New York: 1880-1914." *The American Jewish Experience*. Ed. Jonathan Sarna. New York: Holmes & Meier, 1986. 102-17.
- Feingold, Henry. *A Time for Searching: Entering the Mainstream 1920-1945*. Baltimore: Johns Hopkins U P, 1992.

- Field, Leslie. "Bernard Malamud and the Marginal Jew." Astro and Benson 97-116.
- . "Portrait of the Artist as *Schlemiel*. (*Pictures of Fidelman*)." *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays*. Ed. Leslie and Joyce Field. New Jersey: Prentice-Hall, 1975. 117-129.
- Fink, Guido. "Ecco la chiave!": Malamud's Italy as the Land of Copies." Salzberg 151-65.
- Franklin, Benjamin. "Information to Those Who Would Remove to America." 1782. *The Writings of Benjamin Franklin*. Ed. Albert Smyth. 10 vols. New York: Haskell House, 1970. 8: 603-14.
- Gay, Ruth. *Jews in America: A Short History*. New York: Basic Books, 1965.
- Goldstein, Sidney. "Jews in the United States: Perspectives from Demography." *American Jews: A Reader*. Ed. Marshall Sklare. New York: Behrman House, 1983. 49-119.
- Goren, Arthur. *The American Jews*. Cambridge: Harvard UP, 1982.
- Grobman, Alex. "What Did They Know? The American Jewish Press and the Holocaust, 1 September 1939-17 December 1942." Gurock 331-352.
- Gurock, Jeffrey, ed. *America, American Jews, and the Holocaust*. New York: Routledge, 1998.
- Helterman, Jeffrey. *Understanding Bernard Malamud*. Columbia: U of South Carolina P, 1985.
- Higham, John. *Send These to Me: Jews and Other Immigrants in Urban America*. New York: Atheneum, 1975.
- Johnson, Paul. *A History of the Jews*. New York: Harper Perennial, 1988.
- Malamud, Bernard. *The Assistant*. 1957. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1963.
- . "Behold the Key." *The Magic Barrel*. 57-83.
- . *Dubin's Lives*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979.
- . "The First Seven Years." *The Magic Barrel*. 3-16.
- . *The Fixer*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1966.
- . "The German Refugee." *Idiots First*. 195-212.
- . *Idiots First*. 1963. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1986.
- . "The Jewbird." *Idiots First*. 101-13.
- . "The Lady of the Lake." 105-133.
- . "The Loan." *The Magic Barrel*. 183-91.
- . *The Magic Barrel*. 1958. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1980.
- . "The Maid's Shoes." *Idiots First*. 153-70.
- . *Pictures of Fidelman: An Exhibition*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1969.
- . "Take Pity." *The Magic Barrel*. 85-95.
- Miller, Arthur. *Timebends: A Life*. London: Methuen, 1987.

- Neusner, Jacob. *Stranger at Home: "The Holocaust," Zionism, and American Judaism*. Chicago: U of Chicago P, 1981.
- Richman, Sidney. *Bernard Malamud*. Boston: Twayne, 1966.
- Robertson, James. *American Myth, American Reality*. New York: Hill & Wang, 1994.
- Salzberg, Joel, ed. *Critical Essays on Bernard Malamud*. Boston: G. K. Hall, 1987.
- Siegel, Ben. "Through a Glass Darkly: Bernard Malamud's Painful Views of the Self." *Astro and Benson* 117-47.
- Smith, Henry Nash. *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth*. 1950. Cambridge: Harvard UP, 1978.
- Solotaroff, Robert. *Bernard Malamud: A Study of Short Fiction*. Boston: Twayne, 1989.
- Sorin, Gerald. *A Time for Building: The Third Migration 1880-1920*. Baltimore: Johns Hopkins U P, 1992.
- Thoreau, Henry David. "Walking." 1862. *Walden and Other Writings of Henry David Thoreau*. Ed. Brooks Atkinson. New York: Modern Library, 1965. 597-632.
- Turner, Frederick Jackson. "The Significance of the Frontier in American History." 1893. *The Frontier in American History*. Tucson: U of Arizona P, 1992. 1-38.
- Wegelin, Christof. "The American Schlemiel Abroad: Malamud's Italian Stories and the End of American Innocence." *Salzberg* 139-151.
- Wyman, David. *The Abandonment of the Jews: America and the Holocaust 1941-1945*. 1984. New York: New Press, 2007.